歴史を歩く32

『戦国時代の群像 ～第十七話　肝付氏降伏～』

兼続に引き続き良兼を失った肝付家を支えるべく当主となった兼亮は、わずか14歳で、実戦経験もあまりなかった。そんな兼亮の相手が、島津義久である。総大将としての実力だけでみても圧倒的に島津氏が有利であった。

そんな兼亮にとっての救いは、高隈の連峰が島津大軍の侵入を阻んでいること、東は日向の伊東義祐、西は垂水の伊地知重興、南は禰寝院の禰寝重長といった父兼続時代に結束を固めた国人領主達の援助があったことである。

島津義久は肝付氏を三方向から攻め込む策を講じた。一つは、国分方面から鹿児島湾沿いに南下して、市成と垂水に対峙し、義久自らは、指宿に布陣して大隅渡航の機会を窺っていた。そして、都城の北郷時久には、北面からの侵攻を指示していた。時久は、肝付良兼・伊東義祐の連合に破れ、肝付氏とは和解していたが、義久の命に乗じて再び交戦の構えをとった。

元亀3年（1572年）、6月兼亮は伊東氏・禰寝氏の協力を得て、水軍を使って指宿を攻めた。

この隙に、島津義久の弟である歳久は牛根に侵攻し、9月に伊地知氏の城である小浜城を陥落させ、義久の末弟である家久も合流して早崎に陣を構えた。同じく北郷時久も志布志市松山町泰野で兼亮軍を撃破している。

そしてこの後、兼亮にとって救いであったはずの日向・大隅連合体制は、崩れていく。

まずは日向の伊東氏が、島津義弘によって大敗北を喫した。

永禄11年（1568年）に南日向を手中に収めた伊東義祐は、日向国の完全な支配を狙って、肥沃な穀倉地帯である真幸院（えびの市、小林市、高原町）の完全掌握を画策した。そのため島津義弘が治める飯野地区の攻略を始めていた。

元亀3年（1572年）5月3日に、伊東義祐は3千の軍勢を率いて加久藤城を攻めたが、島津義弘わずか3百の兵に敗れ、伊東祐安ら、義祐を支えていた武将の多くを失った。この戦いを『木崎原の戦い』という。この戦を画期に、この後伊東氏は一気に衰退していく。

元亀4年（1573年）1月、肝付兼亮は北郷氏への攻撃を仕掛けた。志布志地頭 肝付竹友をはじめとする安楽、蓬原、松山、福島の軍勢数千兵を、北郷領に進軍させたのである。しかし、末吉の国合原で北郷軍の迎撃を受け、無残に蹴散らされた。肝付竹友含む、430名余りが犠牲となった。

同年2月、肝付兼亮にとって南の要害である禰寝重長が、その本領の安堵を条件に島津義久と和睦した。島津氏の軍は、新納忠元ら武将を禰寝城に入城させ、南大隅方面から進軍を開始したのである。これにより、兼亮は、一時島津忠長ら、島津軍の主要陣による総攻撃を受け、高山本城まで追い詰められる事態まで起こった。

兼亮も禰寝氏の離反を怒り、根占への襲撃を行うが、迎え撃たれ、犠牲者を出した。兼亮が垂水方面の守りを増強するために牛根城に派遣した安楽兼寛も、天正2年（1574年）新納忠元の牛根城の掘り崩しの攻撃に遭い、島津義久に降伏した。

兼亮は伊東氏と組んで、島津氏への抵抗を繰り返したが、形勢を逆転することはもはやかなわず、とうとう垂水の伊地知重興までも島津氏に降伏した。こうして、兼亮はついに大隅において、完全に島津勢に包囲されてしまった。

島津氏の家臣である新納忠元は、鹿児島の浄光明寺の住職である其阿西嶽を高山に遣わし、兼亮に降伏を勧めた。これに従い、天正2年（1574年）7月の末、肝付兼亮は、島津氏に市成、廻、恒吉の地を返上した。事実上の肝付氏の降伏である。この時、島津氏による大隅平定が成し遂げられ、長きにわたる島津氏と肝付氏との対立関係に終止符が打たれたのである。

三州統一を目指す島津氏が、次に日向の伊東氏を攻略するのは必定であった。当然ながら、そこに肝付氏にとっては、盟友である伊東氏との関係をどのように清算していくのかという課題があった。しかし、兼亮は伊東氏との関係を断ち切るどころか、無謀なことに島津氏への反抗の姿勢をとり続けようとしていた。

これでは、島津氏と肝付氏との争いが再び起こるどころか、今度ばかりは肝付家断絶を招きかねない。この兼亮の姿勢に反対したのは兼亮の母 阿南であった。肝付兼続の代からの重臣である薬丸兼将（＝孤雲『兼郷』とする説もある。）などの重臣も阿南を支持した。

孤立を深めた兼亮は、ついに当主の座を降ろされ、追放されてしまった。そして伊東氏を頼って日向へと逃れた。阿南は、新たに兼亮の弟の兼護かねもりを第19代当主に据え、島津義久に改めて島津への帰順と伊東氏との決別の意を表したのである。

息子を排除してまでも島津に服従する阿南の行動は、後の世に『島津の回し者』としての印象を残すことになった。

（大崎町教育委員会　内村憲和）

▲河南の墓
（肝付町盛光寺跡地）